

繪本豐臣勲功記

五編

五

4 5 6 7 8 9 170 1 2 3 4 5 6 7 8 9 180 1 2 3 4 5 6 7 8





繪本豊臣勲功記五編卷之五

目錄

秀い秀い諫い君い統い惠い林い寺い辰い貞い

屬い秀い右い出い軍い

妙い國い寺い蘇い織い安い土い城い倣い佐い

屬い安い土い宗い禰い

繪本豊臣勲功記五編卷之五



加茂仁冠城邑回伐忍城

属 鎌州世沙

今片相録倉峯行富擊子謀

属 城兵降赤



繪本豊后勲功記五編卷之五



江戸 櫻澤堂山 編輯

先秀諫君燒惠林寺蒙瞶属秀右出軍

喜怒哀樂の幾多のころ氣色に青赤白黒あり是人情の志々し  
むらりといふも又私の石為ふして大丈史の事ふゆらば孝貞忠信  
を守り胸の松喜をとり喜をば松怒をり怒をば衰樂も又然  
る。妻子等の為に心を動くと事分れた真の英雄と謂つ巻一。然程  
小右大臣信長公天下過る平法して外門小怖る事なれば事端内  
より貴勲をる幾箇の果の盡ぶて殺氣轉輪するものなり。若くは  
入道法性院の尊敬せらるる。甲府惠林寺といふ精舎あり。はなはた  
宋の今の府中 快門和南 通世世世の御做ふして の怪職ありしが一山不入の大伽  
の法西に在り 大通智務國師と津法をる



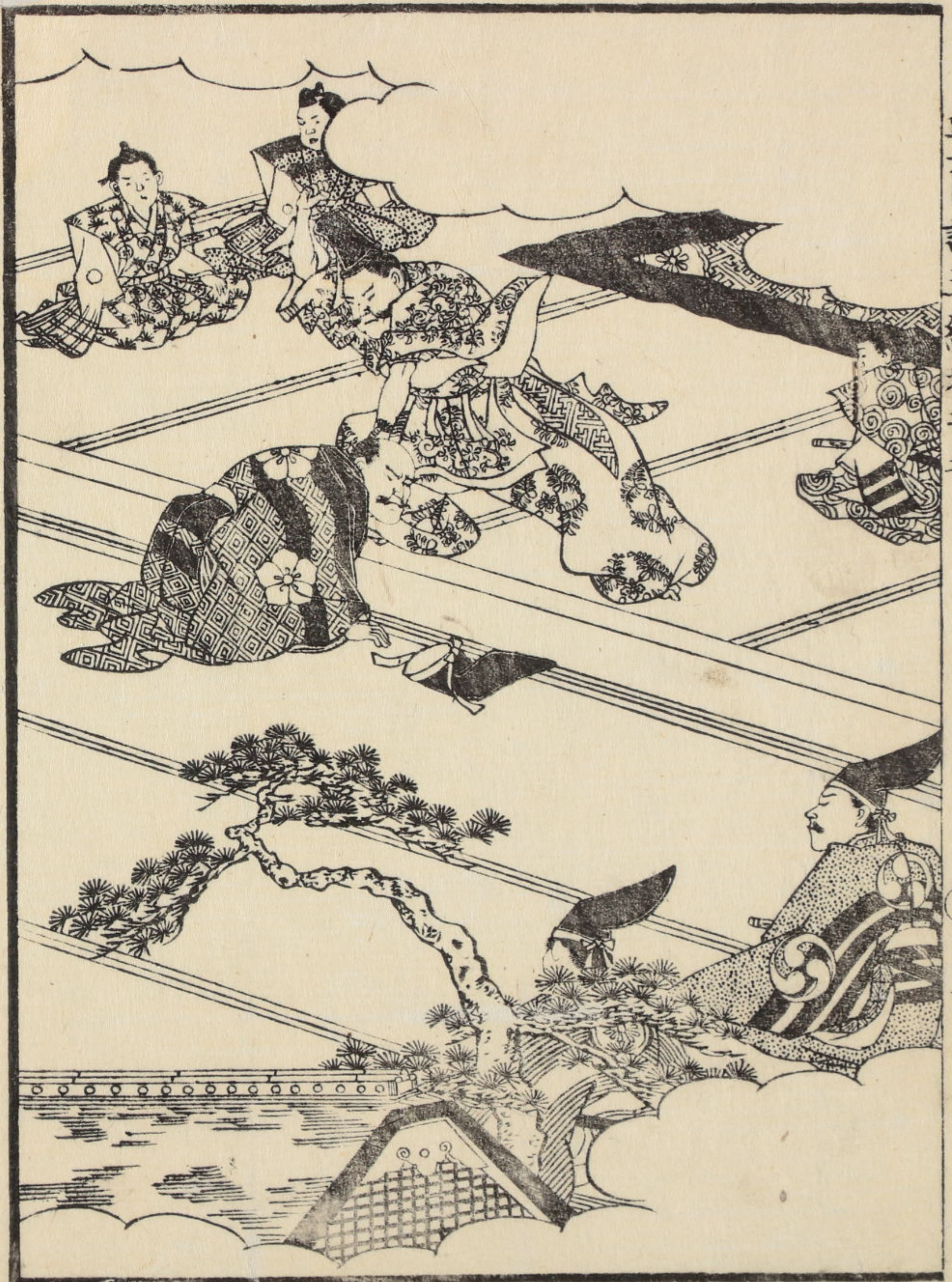
蘭にいて。遠道場小入るるものへ禽獸魚鼈小つるを殺生を禁く  
 禁戒む。これによろしく甲州の諸藩人遠寺中身と執るること最ま  
 く。命を和尙小帰遇して。急灘子船を得たる意味。縁在り。この頭  
 きたれ。信長大小怒りせむ。捕ら出と命せり。かごも一獨寺中に如  
 命を乞ふ。救宥し。衆門をさ。所許宥あれと返答す。右府まじく  
 怒りせむ。探出して。因捕ら。津田九郎次。園小十郎。飯沼命せり  
 れ。惠林寺へ送り。隠く捜求む。既先達て。落共け。是ハ凌小  
 一個も捕得。衆僧候。まても怖懼多て。金山門の樓小潜む。奉行候  
 是非なく。走返。右府小斯と。松へ。若ら。寺院衆徒共。焼拂  
 ぶ。と。所指揮ある。城。惟任。光秀。進。出。形。ハ。物。罷。り。命。せ。り。惠  
 林。結。舎。ハ。性。右。より。達。聞。た。く。は。伽。蘭。に。いて。殊。子。大。通。智。務。國。所。禁。

申。許。願。の。聖。人。なる。哉。や。今。寡。人。を。殺。せ。り。こ。こ。の。罪。を。さ。ふ。め。ら。べ。と  
 づ。とも。原。來。出。家。の。者。と。さ。る。へ。若。悔。を。赦。ふ。は。あり。ぬ。是。ハ。慈。無。り。て。救。ふ  
 出。家。の。道。ハ。武。門。の。仁。義。を。達。す。ふ。同。ト。万。重。衆。候。が。頼。ひ。は。せ。せ。寡。人。の  
 死。を。恩。免。け。り。返。放。命。せ。つ。た。れ。ぬ。衆。人。君。の。仁。義。を。作。す。悉。く。徳。化  
 以。歸。ま。す。其。暴。じ。は。政。道。め。さ。る。ハ。所。に。愈。む。と。料理。す。と。怨。を。含。む。ま  
 多。め。ら。ん。新。小。領。ま。る。國。郡。ハ。責。を。重。ふ。一。符。を。控。ふ。庶。民。を。控。育。し。玉  
 へ。ん。バ。下。より。災。生。ま。す。一。解。く。所。賢。慮。あ。る。ま。り。や。と。自。己。が。何。に。理。あ。る  
 を。も。と。く。自。君。と。も。懐。ら。ぬ。清。養。を。人。の。神。り。た。れ。ば。右。府。勅。然。と。て。賜。せ。玉  
 ひ。一。言。ご。も。よ。く。邪。正。を。礼。して。何。小。相。違。な。さ。り。と。衣。衾。の。政。事。と。謂。つ。べ。し  
 彼。惠。林。寺。の。僧。徒。衆。予。が。命。令。を。憚。畏。ま。す。言。浩。子。絶。せ。一。減。科。法。子。を  
 里。一。獨。令。を。出。た。れ。ば。其。責。を。達。せ。と。や。む。づ。と。疾。燒。拂。へ。と。敷。圍。の。ふ。せ。光





豊臣臣五編卷之五



豊臣臣五編卷之五

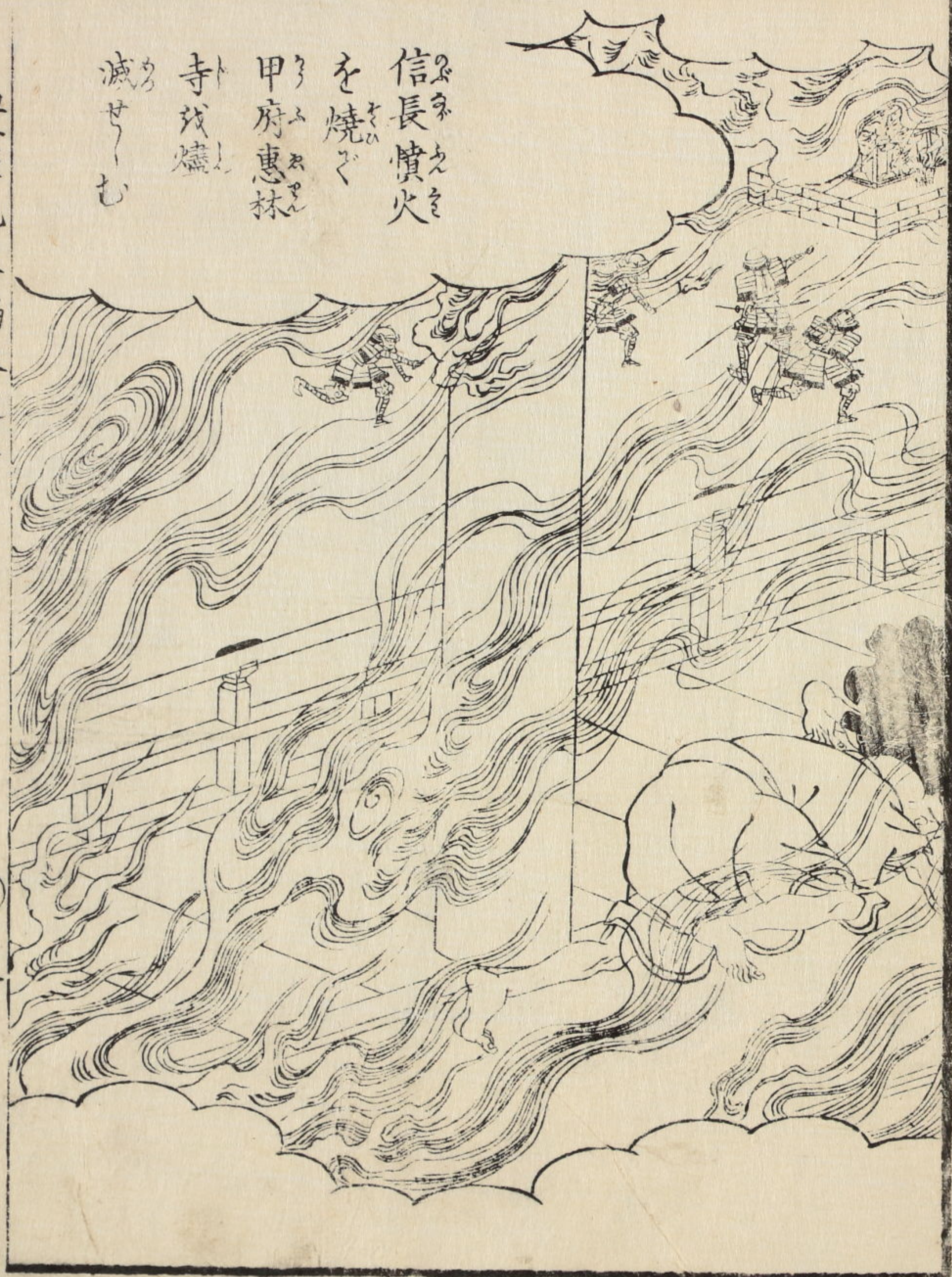


秀推て所盡理ふはいづも。信流はたまれ佛圖を焼く人ことを無道小似たり。先年比叡を焼せられも。庶人の誹謗かみり。方煙直林寺を焼くこと。民の至依を失ふるべし。四海令治らざる。放逸を道の所奉止。只願神慮まじまじと。詞ふ藤や。保めたり。系来龍慮の右大臣。そのころかふ小腹くせり。おのまき光秀。予所行を放逸無道と。那洞を信長は是天下を乱す。悪人なりと。得ぬまりの。悪口謗言。保むるは。民の道と。つども。汝は大臣の禮儀を知らず。顔面を犯して。禪ふとも。文系に君の非を挙げ。六忠臣禮を教ゆるの。金言。然るに比叡の焼殿。おど昔の事まと。授けし。詭情まらること。鶴懐かれ。おのまき。窶て。漂ふ。附朝倉に仕て。用ひらまむ。予以奉候を。獲る。ま。忠情を。そ。次身に。提挙。も。會法長の恩恵。まらびや。然るに。おのまき。成功。小慢。勤ま。予。意。以。背。此。

予を放逸無道なりと。諸將群衆の席をも。所ら。び。ま。を。取。り。め。右。臣。風。頭。の。理。非。を。説。く。こと。を。禮。最。も。甚。く。羽。柴。龍。川。依。が。右。臣。の。勲。功。葉。大。なり。と。つ。ども。快。む。ど。猶。ら。び。君。命。を。守。り。將。骨。碎。身。瀝。み。し。汝。を。榮。耀。小。較。ぶ。ま。其。功。つ。ま。り。大。なる。おのまき。つ。ま。り。れ。武。勇。小。慢。下。を。悔。む。人。非。人。上。を。知。る。悟。言。過。言。お。ま。を。悟。や。ま。ら。た。じ。や。と。懐。怒。小。慢。を。詭。蒐。り。て。光。秀。が。身。柱。擱。む。と。そのま。君。を。固。め。頂。の。ま。誠。は。け。け。お。こ。と。ま。つ。や。の。それ。逆。起。よ。と。近。士。に。命。じ。洞。廳。の。う。ち。を。逐。出。さ。む。在。合。せ。る。諸。士。達。も。嚴。威。小。怨。ま。く。何。張。敷。む。日。向。守。の。ま。君。を。め。く。も。法。以。過。たる。お。擱。せ。られ。諸。將。の。眼。前。面。目。を。失。ひ。懣。念。骨。髓。小。徹。し。た。ら。喜。怒。骨。忽。地。大。小。勅。を。額。の。汗。の。煙。の。如。く。牙。を。鳴。し。て。逐。出。さ。る。が。何。處。小。動。し。細。川。友。孝。光。秀。が。体。を。親。て。志。を。く。對。愈。さ。ら。る。る。が。



信長憤火  
を焼く  
甲府惠林  
寺を燬  
滅せしむ



豊臣紀五編卷之五

豊臣紀五編卷之五





光秀方右の意旨も無く、洞を括て選りたる。信長公ハ在りし命也。并地  
 比惠林寺を焼拂りしむ。彼寺の衆徒ハ悉く山門の上より下る由  
 門下へ來を積累録。八方より火を叩くるがどふ怒懼天よを激し。敵軍面  
 燃焼りて。東西の毒毒も視分び。泣叫ぶ其の悲哀しむるり  
 かりしが。漸く煙火の積まるふ程に。山門上の燒燼を視る。衆徒の  
 身體燒爛。さくすく其の毒の毒。年少き僧兒童儼ハ煙小咽び。大  
 氣小若く。海揚揚臥し。狂叫びて。燒失う。それがかかふも快川和  
 尚ハ法衣を著し。數珠を握り。結跏趺座して。遷化ありしが。煙中又是れ光  
 を放ちて。國師の姿活る。傳く。不思議もまたさきりしと。庶人奇矣  
 のおまひをかゝり。憤むる。活る大精舍燒亡して。元僧ことごとく  
 爛死しなれば。信長さうふ怒を結め。猶も武田の殘黨を誣出さんと

穿鑿あり。小山田丸之界長坂長岡を殺として。勝頼を欺き死を適  
 せしむる軍をさるることごとく。謀殺せしむ。中小純と。小山田丸を勝頼に懸  
 ハ鐵田家小路り導物して。勝頼を伐せしむ。功あまるとも。さ小害なき好誠  
 されば。刑せしむるくおがされし。美田父子。これを仇人と乞ふ。由是信長未  
 が幸ハ昌幸に任せしむ。乃て信長四月朔日。甲別の地を濟費馬あつて  
 東海道を遊覧あり。同月廿一日をりて。別安去に帰城あり。諸亦羽柴  
 秀右ハ合戦の時常當其せしむ。片時も子く中國小下らむと。府  
 比曉を乞ふ。同月廿二日安去城より。三日路ありて。姫路に帰城  
 あり。此地小軍馬を悉檢して。由國出馬を洵出に備。備但國の諸軍  
 勢。純集るが。其中にも。浮田家よりハ軍代として。浮田七兵衛忠家。二万  
 餘騎より。純加し。惣勢約八万餘騎。天正十年四月朔日。援別姫



本宮地山加  
大蔵院の  
西

大蔵赤山  
今うらち山  
といふ

洛を遠敷あり。脩中の園一花白ひ宮地山の遠方なる勝尾峰の絶頂よ  
る。此地をばそらに崇峻をたれ。歌の城六ヶ所に遊身え。六ヶ所といふは山岳山岳  
産をりとも堅牢なり。殊ふ歌の歌大なる小門左衛門流落系なれば。智勇  
絶倫の名士のるる人。後軍も亦勇士多く。小難なれども容易に攻めたり  
人と筑前守其日ハるる。小軍馬を遊めて。秩麻山は結陣せられぬ。

妙國寺蘇鐵女と城御後属安土宗綸

抱朴子にいづく。山中の大樹よく修るものハ樹の修るハ何れ云陽  
時とさハ昂よくと又嵩山紀にいづく。嵩高山ハ大松樹あり。子歳を修る  
その精青牛となり。伏虎とるる。他阿彌記のそのるるハ柳の精を海  
度せ。奇く此例のむれふも何れ。意は怪しき一物修を遊むる其  
をいふと輪なるふ。世の人もよく之聞とるる妙國寺の蘇鐵なり。是を

泉川堺の港にして精舎の新法義宗なり。は道場ハ最博なる  
蘇鐵樹あり。雲突をり長く斜なる。枝のむむハ百餘莖。徑ハ二十八間  
に。猶修りて碧葉年々繁茂。此樹の下ハ生ハ死ハ暴風の吹ふも濡る  
ことなく。快晴の朝も日光の照をせ知らば。古きがたあふ。哉西海の園  
より。貴となく。後となく。道の遠き城殿をたして。見物日狭にむさもた  
む。貴殿とるる多。喧びさく。いりるる由急江やを来より。碧緑の枝葉表裏  
で黄りる。いろの目に増えたり。位階大なる。是城懸ハ水を流さ。鐵を加へ  
さ。急ぐ療術を獨とといふ。ごも。その切みくして。枯果たり。今ハ法を頼む  
ふ。如く。先や法義の切力を顯人と。十箇の本寺に高談せり。いふ。ま  
も。徳ハ一箇寺より。碩學の傳ふ三人つ。妙國寺ハ尚越。より。これハ  
園ハ八十餘人の僧院。拈する蘇鐵をり。小相園。教殊推接で。声のあ



貞享五年己卯三月廿五日



妙國寺の横鎌  
 安土の城中  
 榎栽らるゝに  
 追て晏怪を  
 現す

貞享五年己卯三月廿五日





るにけ。法華經千部を讀誦しつゝ。不思議や經王の功德力にて、黄  
 赤の枝葉刀をうらひ。忽地其色緑ふ變じ。素の如く蘇生しつゝ。佐伯の  
 軟おろしむらび。祈禱に集ひし法師達を、善護で法力の莫大なる  
 哉稱讃しつゝ。塙の津のいふも更なり。又畿内中國東海までも法華  
 の切力廣大ありし。枯木の蘇生なり。たるいと流況日新ふなり。なる。  
 安土の城中にも聆えらる由急右府あまを怪しむ。浩る蘇生はあ  
 るありを吾意前へ移裁て歎す。やとおかしくされ。猶子忠則を使者と  
 して。彼妙國寺へ遣され。蘇鐵を不令せしむ。怪信をなむ。迷惑  
 して。安土へ漸解せしむ。されども。更に許容せず。人杖をとり  
 て。彼樹を穿出。遂に安土の城中へ搬せらる。是是非非を強く  
 も信長公蘇鐵をとり。庭の心中へ裁せらる。諸將を集めて酒宴

して。浩るも愉快氣に漸覺あり。武將も驚き。何事にも食ひし意の隨つと。  
 終日興ふ入るをわひ。あつて。嗚天よをづき。されば。會謝辭して退出しつゝ。  
 怪しや其表庭の面上。いづくともなく震動なり。空の中に。如く。  
 妙國寺へ歸せと呼するふ。是を祈。蘇鐵ももふ。身の色も變じ。うら  
 たり。信長も聆し。され。呼聲中へ怪し。近士ハ。紀やと命  
 せし。危從後。紙燭をさす。漸庭へ。樹木の隈に。祝祭せども。人ハ。さうな  
 里。荒免の。輕きもの。ん。寂寞たり。風の。木の。系動して。蘇鐵  
 此ら。より。夢。夜。なる。強氣の。長。草。木。声。を。な。を。な。を。  
 不。響。ひ。し。心。く。變化の。可。為。る。ん。蘇鐵の。所。を。斬。構。へ。と。命。せ。し。  
 を。と。三。個。太。刀。割。踏。め。蘇鐵の下へ。豆。菟。ら。ん。と。な。り。なる。が。怪。し。や。忽  
 地。又。體。殊。して。音。を。ま。り。も。初。き。得。ば。信長。焦。燥。し。一。喝。し。ひ。擬。令。鬼

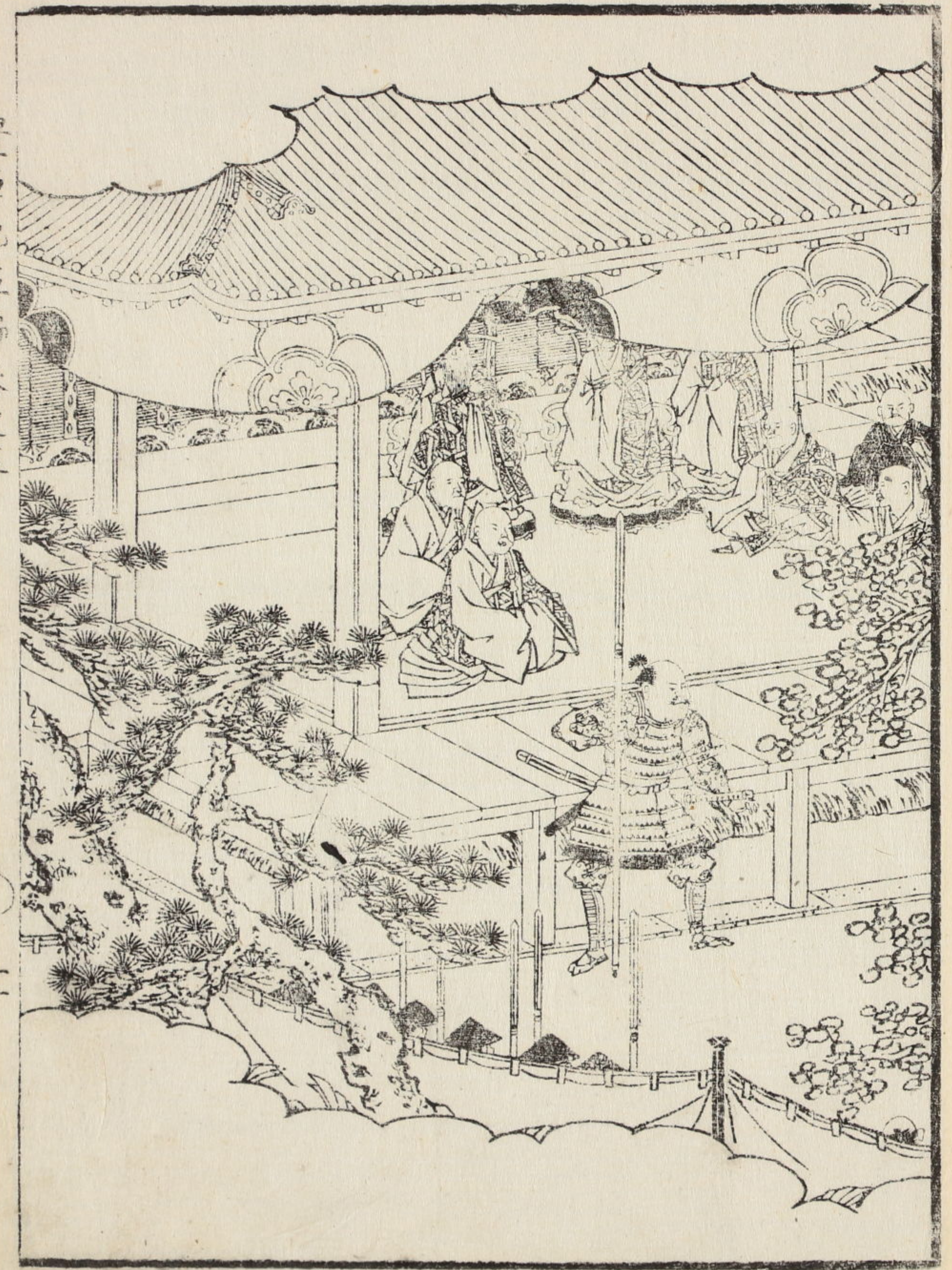


申れ。天狗中道右大臣の位不罪に天下の武將より我に款對物のやと  
 うある處をさううう變化を權惡さんと難刀推把に蘇鉄の中へは情ら  
 んとくく人とも。更に一步も進められぬ。呼柄城やと眼を貯る。後てゆ人  
 くとく人をも。誓石の誓を指さか如く。折拂えんとや。くまは腕痿きて自由  
 あり給ふ。是非なく後へ進められぬ。左右の侍も曉たりしが。かふと申す處  
 と吟聲をう得の信長怖氣ども。河意地割りうらうらけき。いひあふ由急  
 ごと減せられりふ。いりさぬと云ふ。法陽陣をををられ。占考あつてを  
 るべしと。徳信院法印。言状しければ。河門家へ河間ある不是ぞ。すく蘇  
 鉄の崇り。快陣場へ帰るををを。無事なり。危しと折らるふ。いりさぬ易か  
 ら危樹あり。今ハ妙國寺へ返さく。蘇鉄を渡送せられて後ハ偏意地  
 強さ大將信長は事ごとく遠眼おがされ果ておひあふ。せん。と。感念に會

申すまひひる。然がふ妙國寺ハ蘇鉄の不思議度大なること。近國に流  
 布くたる由名平日とて。我宗をりて。致さく。稱揚他宗を埃のやに泥汚  
 け。獨るさま多る中に蘇鉄の不思議をんうりも。今ハまきく。池家城  
 情り。情なき人のたふも多と云。茲に安去の高史より。壇信傳内といふ  
 之のあり。壇法真ともいさる。かどの。日蓮信者なりたるふ。貞安和尚といふ  
 碩徳。安去淨嚴院へ情結して。四十八夜かそのあひ。淨土の法法くわひ  
 たる哉。壇法真の壇信傳内六七人の同士哉。率い。貞安を拒人と淨嚴  
 院へ入りたる。貞安もく。情内こと死小服せらる。却ていつく。恥めり  
 是。難断せむ。つも急歸り。急切なりたる。系於碩妙寺の學僧普傳房  
 が許し由り。貞安が事を。名禪小。普傳大。小懐り。然ハ宗論か。と。十六  
 本寺へ預ひ出。並流安去へ祈祝を。その是。小依て。寺社奉行。管前九石門



安上浄嚴院小  
おい浄土宗  
日蓮宗各  
その宗儀を  
論ず





津前一言状なれば速に津許宥あり。津去宗右安和尙にも命馳らし  
是。安右の城下津嚴院におく。津去宗日蓮宗の法倫とぞ及ぶ。各其  
座を東西に殺せ。信長公おの正廳におく。判者聽命もそれく座に  
着。然る宗倫の流説をを不聽えなれば日蓮津二の信者ハ勿論。諸宗の  
道徳を奉て。安右津嚴院に走集る。宗倫の同善長とてつる。然る日蓮宗  
の學徒達。おのが器量のたゞのけ。吾導法然の語を執く。其論く  
難問とてつる。安右得の智者なれば。声不絶して善破せり。然る  
て安右法華藥王品の文句を引て。若女人ありて。是經典を聞説の如く  
修行せば。是るも安樂世界の阿彌陀佛と。信處小住て蓮花中宝座  
の上に住びといひ。何ぞ念佛之間と流説とや。いふくと同鞠ら。日蓮  
宗を奉て。信む要を正面の津藤さうくとを揚させられ。信長固

解を多く揚て。宗倫一聆徹せたり。日蓮宗閉せしめる。傍殺し。小分  
明あり。安右切骨とて持する團扇を揚りなれば。判者奉行一同に津去  
宗ハ傍よりと時よりける。小分諸宗の道徳を奉て。安右の持徹を  
を棄つぬものこそなると。ありま。信長日蓮宗城増くあり。小  
分をれば。岩重小分中けられ。

加藤証冠城島田代意城属謀刺世沙

翼ある物に多たふ畏む。替ある物の深さを怖む。後日豊公ハ翼織  
面をわづ持つ不細く。然るも羽葉荒花。秀石の備中の國鉄底山に結  
陣せり。小分軍首に冠の城を攻陷さんと。并も此城ハ林三郎左衛門尉  
秀新左衛門守景。松田九郎左衛門保貞。今川源九郎時國。尾形宗重。後  
其の勢初合八百餘人。凍然とて對敵守。是も不敵て秀石も將を擇んて



八幡ふすしと加藤虎之助清正に一千餘人の兵士をあつて冠山に向ふ。是  
 に臨み老意に八木村又新井と大九郎加藤清正清原直之助加藤清正  
 若吏石舟斎左衛門春澄源五郎海城をつくり太鼓を鳴して攻めつけし。六  
 城の林の守りたる兵士に指揮して矢銃を落し大木大石を抛棄し城  
 門をくわし倚着す。息を次せだ防戦を進まはる石舟斎もせだ橋城  
 突立後を傾け軍勢急小改着る。軍の猛勢大をくわし薪を焼か如  
 くそれバ水せりて火小潰れか如く清正防索の石舟斎を殺す。是一途  
 以ハ改かじと勢を二隊に分列せしを改簡さくしと指揮しつゝも秋末七郎  
 若由門城して宵門に向ふたり。清正石舟斎の城中城に敵城ありと  
 せ下と囁動もく候と胸こそと虎之助諸勢に懸く指揮しつゝ  
 城門を攻登る。胸ふ城門を破くと同じ。後托けつゝ一個の武者走出し

後投弁虎を脱て大地に降俯す。是を看より機兵輩やせれ秘賊も傍  
 固右衛門将す。そのと退來る候。進まの先陣石舟斎兵舟門架の降参の  
 者もろど快助けと候もろど。冠軍の兵士十六六騎一吐小敵手後ま  
 ちを統小。驚らふと候もろど。彼固右衛門は案を傳後陣に送り  
 且亦大將虎之助清正の懸く指揮して進まをり。城方の將士も城  
 友系松田九郎左衛門投立す。と強塞がる清正も是候者もろりも。風小降  
 る猛虎の像く。正文字に馳着て冠の城に一騎。加藤清正の清正  
 これも跟従と候もろど。つぎにこれれを亦一騎。甲賀潜御列義部十郎  
 次。二番務と又呼く。進むもろど。方らとろど。亦一騎。秋原七郎右衛門の内  
 以かい。山本重兵衛。三番務と又呼く。馳投る候もろど。秋原七郎  
 鏢の哉を正當小梅。進まの大将ござんれと擲て鬼もろど。虎之助十文



字の餘輝を以て。月影に因りて。左近の敵を鎮ふく。級擧ぐ。擧起ら  
 ざる。自由なる。餘輝を擧棄。太刀のりて。やく。從時め。加藤が。餘の。鈍  
 を斬らん。と。腰首あつて。我着。現。遠方の。名。不。遠。不。怪。力。青。湖。遠。以。か  
 ら。ち。力。扶。墜。され。る。より。下。へ。擧。擧。を。する。彼。處。不。い。亦。不。上。大。九。吊  
 横。突。して。も。城。門。不。少。く。松。田。九。吊。左。衛。門。又。斬。て。蒐。里。我。合。あ。り。ぬ。小  
 井。上。が。逃。さ。る。ぐ。令。討。つ。こ。水。間。の。方。へ。逃。出。た。治。願。不。成。不。我。を  
 走。が。適。し。い。せ。と。急。寒。り。捨。突。出。され。不。後。不。失。速。一。擧。擧。し。る。を  
 雙。方。擧。す。不。不。突。後。斬。不。蓋。の。深。門。以。て。不。く。首。を。毆。ま。る。諸。兵。松。原。七  
 兵。右。衛。門。の。背。深。の。羊。腸。控。より。轟。攻。不。せ。ぬ。極。け。今。門。原。九。吊。右。衛。門。が  
 せ。る。途。と。若。衆。し。る。を。本。村。又。為。擧。捨。入。る。遂。に。時。國。を。毆。捕。し。り。これ  
 ら。の。猛。威。不。城。兵。擧。方。僅。へ。慍。と。と。打。連。て。降。参。を。乞。は。れ。ども。遠。城。攻。の

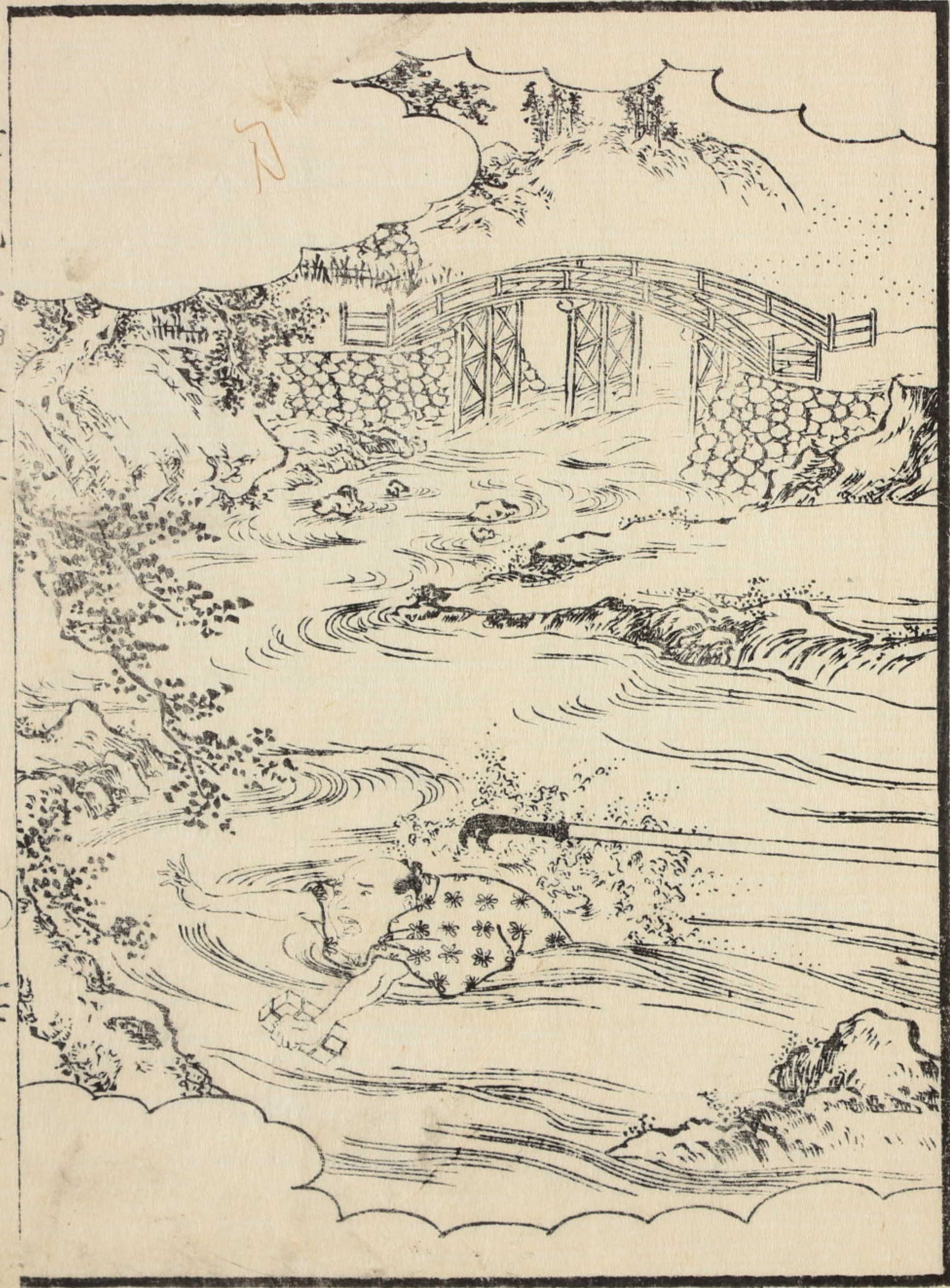
秀吉が四國九州の極涯までも軍威を示し合戦の意を盡しせんと擧起  
 る。仰伏集散揮びゆく。愈々く歎く。遠き。大。將。林。敷。定。も。進。兵。の。擧  
 以。先。備。し。大。勢。の。中。に。城。を。し。て。不。九。過。す。の。燒。夫。れ。バ。慍。と。と。み  
 と。南。に。より。舟。を。奉。り。て。遁。出。す。松。の。城。へ。收。走。し。たり。これ。より。て  
 冠。の。城。忽。地。落。さ。る。と。是。に。馳。率。を。命。じて。出。火。を。鎮。ま。せ。花。原。守。一  
 使者をよる。不。城。の。伺。を。從。伸。ま。秀。右。衛。門。大。に。悅。喜。し。恩。賞。を。れ。し  
 に。行。な。れ。別。々。加。藤。清。正。の。威。帖。を。り。て。賞。せ。られ。たり。不。清。を。擧。擧。の。諸。兵  
 朝鮮征伐の表。冠。の。城。既。に。落。城。し。たり。軍。費。より。と。統。起。即。地。不。進  
 ぬ。り。て。水。を。塗。く。冠。の。城。既。に。落。城。し。たり。軍。費。より。と。統。起。即。地。不。進  
 不。宮。地。山。の。恩。の。城。へ。攻。蒐。す。亦。も。遠。城。の。不。不。瀨。疾。三。一。河。河。り。て。後。不。言  
 山。時。連。王。最。も。嶮。峻。なり。たり。此。山。より。城。を。沈。沈。是。時。門。と。戸。を。分。明。を  
 くの急。款。備。此。山。より。攻。り。や。ま。ら。んと。山。の。峯。上。に。は。も。披。寨。を。擧。不。右。衛。門



尉俊春。思慮を成爲す。二百騎ありて。備又思の継城なり。豫念か  
 蒙の城中より野英少輔七弟元信。之刀居。彈正右衛門久和。同舍弟。孫十郎  
 久國。と凝守。置て。思の城に。部軍と。さうめ。然して。思山の大将。日比右  
 木村辰五郎。孫少六。百有餘騎。少く。率城に。然る。小進兵の。大将。黒田  
 官兵衛。孝高。略頭。安丸。右衛門。孫正。小糸。ト。あま。子。随。歩。行。大。將。の。本  
 平。大。丈。盛。常。多。り。其。勢。之。子。五。百。餘。騎。思。山。の。城。に。推。進。多。り。前。の。急。流  
 の。洞。河。に。着。き。心。懸。よ。馬。を。誘。投。ま。は。け。や。つ。け。と。呼。り。喚。り。遡。く  
 輒。と。推。涉。ま。は。り。色。を。絶。り。之。千。五。百。喊。を。率。爲。統。を。つ。る。け。奔。く。と。攻  
 登。る。城。も。頑。く。准。備。せ。り。久。砲。矢。を。惜。り。不。防。戦。也。色。を。小。す。り。つ。く  
 魁。之。の。難。卒。二。十。人。獲。殺。さ。り。斯。と。犯。り。り。黒。田。官。兵。衛。力。戦。の。素

自軍の利あり。奇兵をひいて。攻隔さんと。選擧。吹て。軍勢を。河の遠方  
 一選。過。さ。せ。諸。士。兵。集。め。く。城。攻。の。軍。議。を。あ。ら。く。做。在。り。然。る。小。思。山。の  
 城。將。日。比。右。衛。門。の。少。丈。の。當。國。の。郷。士。世。沙。左。衛。門。の。次。男。あり。しが。毛利。家。に  
 旗。本。日。比。將。監。の。母。方。の。縁。者。多。り。以。將。監。一。子。を。死。せ。り。久。左。衛。門。の。次。男  
 を。養。嗣。と。して。日。比。の家。を。相。續。せ。り。右。衛。門。の。少。丈。改。之。と。稱。せ。遠。遭。思。の  
 城。將。と。して。今。更。父。子。の。あ。つ。く。一。遭。對。面。を。さ。す。思。と。款。を。や。城  
 を。嚴。く。圍。ま。て。出。入。も。容。易。く。な。り。が。さ。れ。ば。い。や。と。思。と。沈。吟。し。つ。  
 進。軍。の。陣。取。つ。大。を。威。す。款。を。め。り。久。左。衛。門。の。次。男。の。胸。に。城。中。より  
 も。政。出。人。と。勿。論。も。不。款。の。故。軍。必。定。な。り。我。子。の。切。巻。款。を。や。先  
 料理。人。と。折。翰。を。書。記。意。利。な。る。健。奴。は。鳴。思。の。城。に。使。え。り。む。然  
 る。小。思。田。孝。高。ハ。寸。刻。の。間。も。斷。断。と。情。見。を。出。し。お。さ。な。れ。ば。登。く。も。世





上野の多摩川  
 由沙則之  
 謀計を  
 忍の城へ  
 通せんらむ  
 密使をもち  
 橋せらる





沙が使奴を見と懐く奴を拏捕入と使車四六人並菟色に有無を言  
い候逃出を候備ふを好害許さすといと追蒐られぬ案も疾速者  
城門當て走行を黒田梅須賀の陣中より數十人走出八方より推提  
圍むに慥と下を思ひ人河一趨没と逃投たり然ども追出ハ多勢を  
逃六逃深とらると能く逃にるる活捉らる考多茶一拏来る宿  
之湯密書を展視し書面ハ何の思材もなし考多意に研らるがう大拏秀吉  
小折ふる菟前守これと聆とを密使に想遠なり吾徹礼して謀計の  
種ふとて候拏拏来とて命トられ使車們もかくも被使奴を秀吉の  
茶一拏居る菟前守と考多うか小汝密使よあつて人怖る事のかる一と  
候はしと疾あつて猶の逃走るるを證控られ肌を痒小穿探然と下候  
に使車們ありうさなり使奴と忽地赤鯉に襲律を看れを懐くも細小

書わら密文あり其文に曰

長久保不轉面獨之知今度南城之勢控に出身之は孫重之存  
然亦秀吉く種勢到け地攻打南城之来不慮憂の依之我  
考後和款陣之令放大なる其幕突出可致けり候と

四月十八日

世沙居左邊門則之

日比右邊門を吏居

と記得たり秀吉の色を續り荒外と若く脇坂基内をかく括と那般  
那般に箭紙置一之口属を領養か一自勢率從飛か如く世沙が住  
下小池向ひ居宅の四面を推捕圍之居左邊門を捕へり小卒老され若も  
く那般に羽袋が本陣へ拏来る孔明に陣むる詞かく遂に始終を拓道と秀  
吉軍河に針織を下候し大刑の事候議らるる一む志はにりて官云



清は其夜のうちに茅枯柴を取良め。城より遠き一町をり隔たりし。推して  
丘より積揚りて四面の山より火をたたく。遠近亦不極を立相の幕を  
張繞し。城より火を視ゆる事あり。城を不極を立相の幕を  
着。是の夜に降酒を煮本黒田の勇を秦野桐着浦と名をまふ人  
と。松舟引く茅草たり。浩る準備せざる際。夜に曉くと曉ると城  
よりこそ滅着て。呼懐しに柴山よ。大箭を射蒐く焼盡さんと揣起る  
野山宮内制し止りて方僅風山より吹来は城中大頭子白ふ。正  
半に火くは南風おらる人。其胸焼む可なり。要胸等糸と止む機  
命。羽柴の陣より使者来て。城門外不呼ぶ。吾ハ羽柴の使  
者にして。平野控平長康なり。主人の命を彼よりて。城将日比氏不極  
る品あり。兼受ふといへ。彼を左衛門が記書たる。執事伴の密書と

別ふ。筑前守が書帖を出て番兵執て研置はる。大將の命は受けられ  
ば右衛門を吏と見た視る。欲將秀吉の書帖一通。実父世沙が自筆にて  
怪しく書たる執事伴の章。秀吉が書を祝くや。道遭世沙左衛門。謀  
りて諸軍を焼んとす。その罪状をうらぐりけり。陣前においし世沙が旗  
審成。大刑におらる。むむむを詞諒凡に記したり。政之おわいに驚顛  
か。いひおせん。諸將に問胸。野山粟くたる事。日比氏の心底さる  
し。と泰陽敢く羅む。方僅實父は目前。大刑せざる事においし。阿若  
阿若者弄ておらる。他は何もあは官内においし。即地域をうらぐ  
世沙氏を助けん。大刑に己時とある。大を懸ぬ。うち  
救命せさせ。各いふ。智く。若来つをま。いふもさる。常夜。本村も  
ら。是に同意し。其の批發人と疑え。右衛門を吏政之。あは一途。方



父の火刑を  
救はんを  
日比政之却る  
秀吉が  
謀計を  
陥る





僅燒まんとする又世沙を奪取らんとの不念なれば軍の傍役の料理もよ  
 らば。駛率に指揮して彼柴山の四面より百姓衆を逐散せよ。君も幾く  
 突散せんよと城門閉を推し。大刑の場も集りたる百姓衆を逐散れ  
 ば。我門のくろく遮るべき。まを趨くも逃散せり。城も心成意あがら。柱に  
 掛りしを左衛門の解却せんとなれども。又藤子も相見する隙なれど。  
 いうまされども解ことゆえん。左ふ右濡踏そのうちに。日比野山嶽並より  
 作流するす。柱も共み撃後之指揮する夢のおそろそそぬ。暗蹄と  
 こそく河洲に敷く。と搦獲を敵と共に。黒田の勇士秦相若。唐團  
 扇の常標。六尺餘ある鉄の棍を。芋穂の像くお振る。城もあへて進退  
 こそ不活て。かろくと馳廻る。野山宮内それと見え。又を刀振る。批て蒐る。  
 相若鐵棍推把整。黒田が自内も鬼相若といふ者を。知らりたるうと。又唱

一聲。微塵にふさんと。撃杖鐵棍うけ。終る宮内を。劈面兜と共に。ち砕れ。  
 血煙まき。頭突入り。峰頂。虎石。勝正の長威。把と馬を。徒ら。日比野  
 つら史に。翔と蒐る。攻之も傑氣の。壯士なれば。壯中。共み。餘を。合せ。秘術を  
 掲して。我ひなれども。了。得子。猪ま。刺。姚の。虎石。海。か。鋒。鉄。に。款。當。を。を  
 櫃ひが。遂に。肩より。背へ。け。榊。接。る。小。猪。持。た。れ。馬。より。檀。と。落。る。こ  
 ころ。を。空。を。さ。び。首。級。段。投。る。よ。よ。攻。破。を。と。黒。田。將。領。賀。千。龍。万。虎。虎。虎  
 雲を。起。ま。か。係。さ。猛。威。を。奮。ひ。遂。に。城。門。を。う。ち。破。り。怒。潮。の。像。く。丸。入。け  
 ば。城。を。守。ま。る。者。若。木。村。も。弘。軍。中。に。殺。死。す。残。る。兵。士。十。瀬。城。倒。命。の。を  
 ぐ。逃。失。り。り。由。急。一。城。容。易。落。去。か。ぬ。左。衛。門。を。大。刑。小。行。ひ。然。し。て。秀  
 吉。又。言。状。し。な。れ。ば。荒。茶。守。者。分。粉。骨。の。地。を。威。脅。か。す。中。に。も。秦。野。相  
 若。の。野。山。を。も。め。段。投。首。あ。り。七。十。六。忠。合。戦。の。大。地。を。り。と。荒。茶。守。之。も。ぐ



も。孝高をとりて養せられたり

今片桐板倉峯行富撃謀馬城兵降参

兵法一編の力。侯封万戸の榮。その功を成来りて。冠の城。忍此城一年をど  
を。城をい。進。板倉が家。を攻んと。京遠城。浮田家の。不領。なり。し。を。  
毛利の。た。め。に。奪。え。し。る。浮田の。軍。代。七。兵。備。忠。家。花。房。志。麻。呂。忠。誠。  
前。守。板。倉。が。家。の。城。攻。を。強。て。毛。兼。向。と。し。て。秀。長。に。これ。を。解。し。  
別。子。相。助。旭。を。相。副。謀。計。を。言。合。め。長。櫃。一。扛。を。進。與。さ。れ。し。り。片。相。助。  
を。城。領。受。め。し。備。前。勢。を。魁。兵。と。し。て。其。勢。一。千。八。百。餘。騎。板。倉。が。家。へ  
推。進。す。然。る。に。彼。城。の。諸。將。違。に。進。兵。今。也。と。待。り。し。六。七。日。の。鏖。戦。あ。り。  
款。推。來。る。指。池。も。な。し。漸。く。多。羅。天。晴。り。の。に。を。幸。く。勝。り。し。人。馬。此。路。呼。  
顔。城。を。寨。接。より。り。是。以。着。る。ふ。彼。城。の。魁。兵。も。中。り。も。飯。の。半。腹。日。七。推。

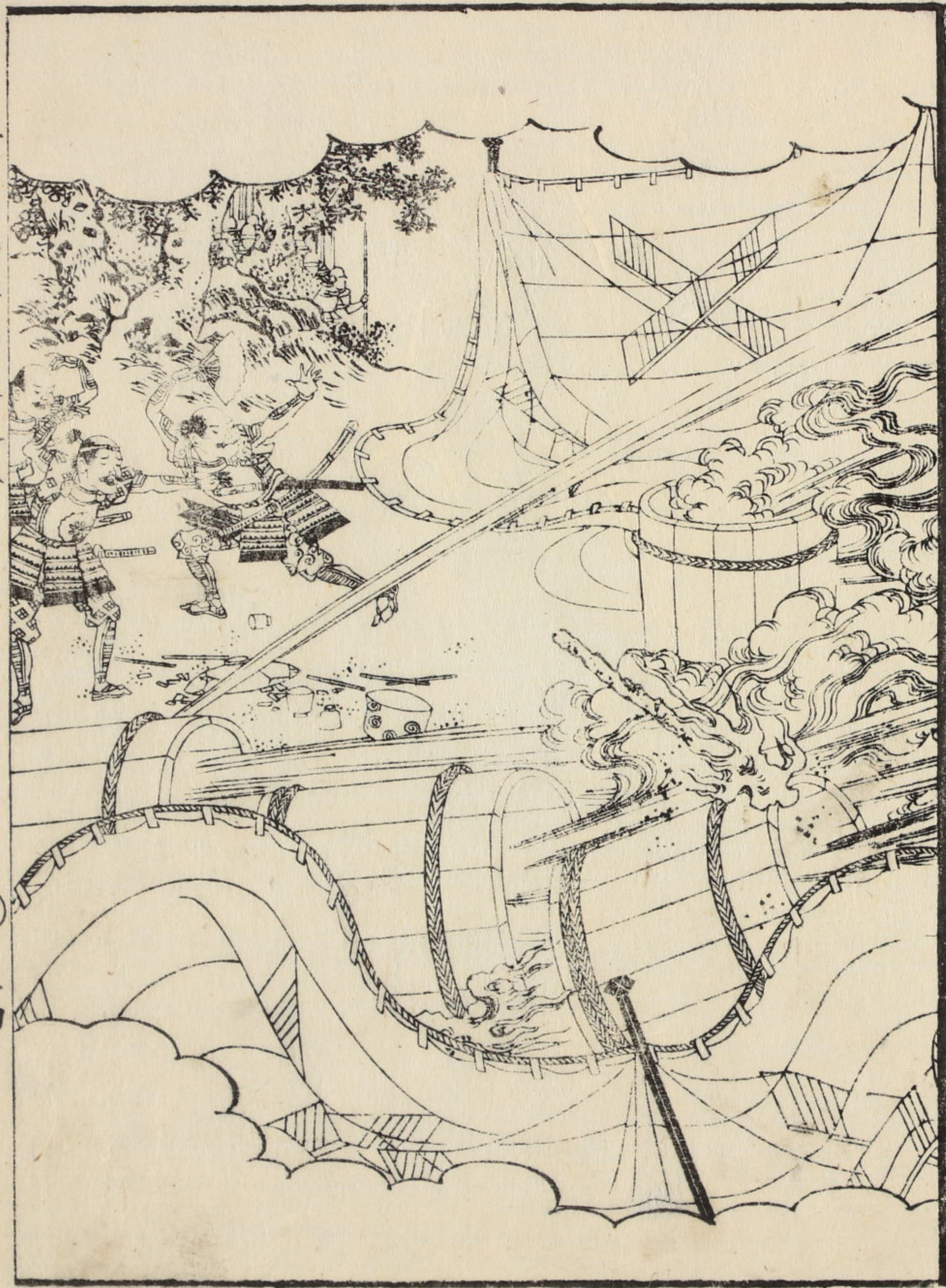
登る。城將の領より。軍の評議なり。軍城の。一。七。後。格。の。勢。を。約。處。  
し。と。評。議。を。決。し。款。進。れ。ど。も。あ。ま。城。防。が。た。を。と。ま。せ。し。し。に。給。に。諸。城。の  
情。と。い。ひ。ぬ。初。く。進。兵。の。城。側。を。た。し。陣。を。據。す。諸。勢。に。む。か。し。川。息。を。次。  
せ。し。ま。り。や。攻。上。と。は。希。希。勢。去。來。の。恨。を。と。り。し。と。と。搦。寇。る。代。片。相。助。  
て。款。の。十。分。地。の。利。を。得。し。必。死。の。軍。城。の。り。た。れ。ば。無。謀。の。合。戦。志。も。し。  
か。ら。び。乃。士。を。と。り。の。謀。計。あり。那。般。に。如。斯。く。い。ふ。と。叫。び。し。り。ふ。ぞ。七。を。  
揚。燬。現。に。お。も。ろ。ろ。計。議。と。款。説。人。と。同意。を。以。備。城。中。に。款。兵。今。  
そ。や。攻。進。來。る。か。う。ん。と。待。ど。も。陣。勢。を。張。た。る。の。と。り。ま。く。更。ふ。登。來。し。た。れ。ば。  
り。に。矢。着。ひ。も。統。ふ。た。ぬ。と。い。ふ。疲。る。ま。く。に。等。し。て。從。小。日。談。暮。し。ぬ。  
然。ど。も。攻。進。る。氣。色。も。見。え。し。バ。城。兵。五。六。より。集。ひ。兵。糧。を。と。り。喫。し。り。  
休。息。せ。ん。と。お。も。い。ふ。と。ら。ふ。城。う。り。辰。巳。の。方。に。向。り。て。秀。統。を。呼。び。喊。を。



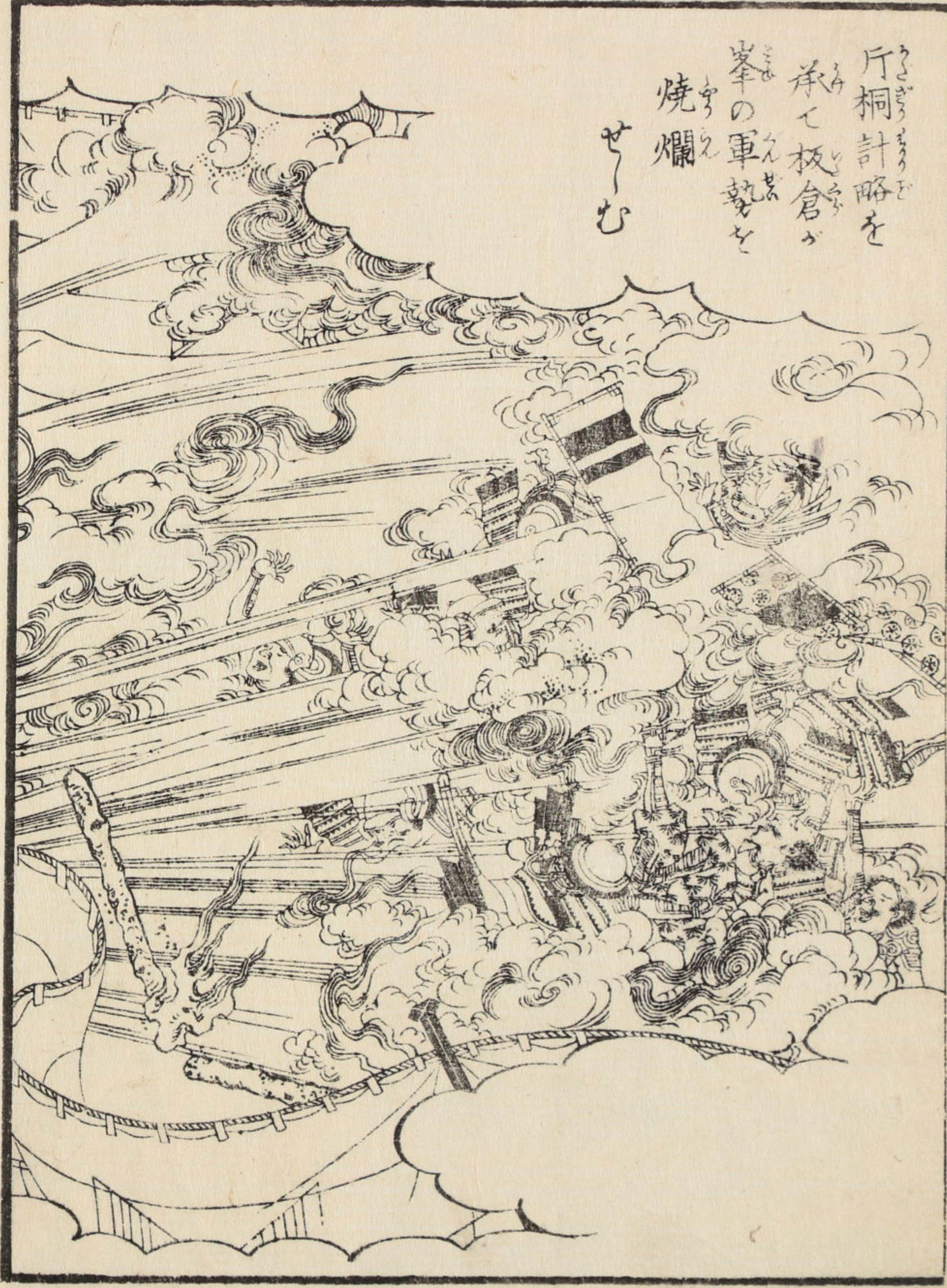
法より。緊しく進来る体なり。されば城兵はさそや新軍なる。と面くも場  
 く。いん。城を合せ。香流を撃た。挑発るといふ。この。周旋に。幾され。  
 軍馬の。喉。駭ゆり。の。城。色。を。く。来る。とも。え。え。げ。然。ど。と。香。流。の。香。お  
 び。た。じ。く。む。さ。も。新。ら。ぐ。向。さ。た。れ。ば。咽。る。も。福。ぶ。ら。れ。心。を。焦。ち。く。夜。を  
 噴。く。ぬ。城。兵。進。軍。の。陣。を。際。め。當。る。確。備。も。あ。さ。駭。る。由。急。駛。車。倣  
 目。づ。ふ。安。途。して。休。ま。ん。と。せ。れ。ば。亦。つ。く。ふ。や。暗。号。と。覚。り。た。大。棒。天。を  
 焦。して。費。沖。也。す。の。奉。あ。そ。と。備。態。か。い。始。に。美。中。に。靜。ま。り。却  
 て。着。も。せ。げ。斯。の。如。く。に。城。兵。を。欺。約。る。こと。三。日。三。夜。今。ハ。白。晝。燈。の。か  
 ぶ。く。む。さ。も。如。く。び。放。ち。蒐。種。く。不。の。煙。形。大。怒。虎。の。尾。群。鳥。星。降  
 白。龍。赤。龍。子。羽。衝。と。お。そ。ろ。ろ。さ。相。試。頭。を。蒼。天。せ。り。と。親。分。た。  
 款。も。自。方。も。一。様。に。掌。拍。く。榮。堂。起。疲。を。忘。れ。く。観。晴。々。夜。不。入。ハ。亦

幕。夜。の。如。く。改。蒐。る。体。なり。たり。由。急。城。中。今。ハ。疲。を。果。す。ハ。防。ぐ。兵。士。あ  
 れ。ど。も。本。ハ。お。の。を。忘。却。して。ま。た。る。怪。不。ね。む。る。あり。其。夜。の。變。て。城。中。を  
 視。ま。す。遠。地。那。處。に。幕。を。り。ち。張。その。草。針。指。の。風。に。も。ま。れ。く。翻。る。胸。布  
 幕。の。り。ち。を。視。く。中。を。い。ま。く。れ。駛。車。酒。を。飲。醉。味。て。や。あ。そ。ひ。く。小。樽。様。終  
 を。復。藉。く。右。鼓。都。子。を。枕。と。し。右。横。左。横。に。卧。在。り。城。中。の。兵。士。あ。そ。を  
 着。く。憎。く。も。奉。止。款。の。奴。者。先。毆。殺。く。同。に。も。の。視。せ。ん。と。鏡。激。く。たり。を  
 野。兵。少。補。思。想。る。史。想。を。更。り。思。ひ。の。出。れ。たり。と。せ。大。小。馳。走。諸。士。の。勇。憤。發。に。あり  
 あり。俺。們。今。天。の。魁。と。て。款。の。奴。者。を。逐。殺。し。傷。ふ。ま。す。と。て。本。陣。を。せ。れ。入  
 せ。ん。と。揣。り。たり。伐。在。差。右。横。の。尉。俊。春。これ。も。思。ひ。の。事。に。率。城。を。圍。く。制。し。止。む。と  
 とい。ども。これ。を。用。ひ。び。元。信。成。美。三。百。餘。人。の。揣。兵。を。率。從。圓。風。推。開。り。て。突  
 襲。を。辭。例。き。て。万。進。軍。の。鼓。率。們。駭。噪。く。肺。を。穿。り。飲。散。く。たる。ま。く。此。後。人





斤桐計略を  
 承て板倉が  
 峯の軍勢を  
 焼爛せむ





焚燒しつゝ燄火を抛着て中陣當て逃走す。斯と看るより城兵亦先  
 手よく撃ち出さず逃散す。然るも橋の鬪撃をれば抛着たりし火移りて  
 中より大玉燗つて一面ふたとなりたる由也。城をこれみ驚に隠く。逃人とされ  
 ども前後もみせぬ。途をみよく喉く隘ふ。忽地燄火に撃ち僵され。死する  
 輩數百人。残を被ふ者負知是に。大將元信成兵も。烈火のあふ捕縛  
 られ。惶遽るものもこれ大勢漸く鎮する。後着く。進を一連に喫て暮り  
 散るに粒起りれば。鎧而も城兵一個もあらず。外つ瀬に敗走しけるが。元信  
 成美の今更に。後美の面を辱しけり。死地殺場を觸る。殺風瀨ふ事  
 動なきもの。火毒にあたりて困憊する。進兵の勢威極烈にして。遂に  
 城測す。投槍られたり。元信今のあきも。とやあをひたり。馬を弄る。宵  
 後の山つ遊行を浮田右家さむ。一々遊蕩。只一鎗小擲殺す。あまきと等しく

依前勢。既城門へ初投す。烈炎怒潮の威を奮ひ。一二丸杖を取らる  
 にぞ。夜は後春。三刀右久國七百餘人を扶護み。諸の丸へ逃投ける  
 が。今へ生留記をちみけき。頻に降参せられども。依前勢へ去ぬ。年  
 年の遺恨あき。孩兒奴僕も。斬盡さんと憤嘆し。たるを。片擲  
 助作制止。新降参を乞う。仁茂も軍慮。此ふこと。城將二人  
 に切腹させ。士卒の助命をさし教へ。あきらけ始終を法ぬ。が。かふ  
 筑前守一言快く。降参の駛率七百餘人。城を陣へ伴て見参。あき  
 む。秀吉降人ふ命とる。去ぬ。浮田の遺恨。あき。何事。バ。助置。つ。こ  
 にあき。孫ども。格別。あき。け。城。あき。助命。あき。贖。あき。忍。の。城。  
 冠の城。板倉が。軍の。城外。城。穿。つ。と。東。罵。く。板倉が。家。此。一。城。ハ。  
 素浮田家。此。不。傾。され。七。七。清。忠。家。に。安。属。屬。く。と。く。け。地。の。改。事。



おちろく令一帝路の歌城日細れ疎漢を窺せり

繪本豊臣勲功記五編卷之五 終



